

# 立春能

平成三十一年二月三日(日)  
開演 午後十二時(正午)  
開場 午後十一時  
於 宝生能楽堂

## 演目の解説

12:00

### 金札

シテ葛野 りさ

ワキ野口 能弘

ワキ野口 能弘  
” 梅村 昌功  
間 山本凜太郎

大鼓 柿原 孝則  
小鼓 大山 容子  
太鼓 梶谷 英樹  
笛 杉 信太郎

**能「金札」(きんざつ)**  
桓武天皇の臣下が大宮造営中の伏見に赴くと、人々に交じつて神主婆の老翁が現れ、言葉を変わらぬと、天より金札が降つて来るという奇瑞が起きると、臣下が金札に書かれた文字を高らかに読み上げると、老翁は伏見の謂れを語り、天津太玉の神とは我なりと名乗って宮に入ります。金札を頭上に戴き、あらためて神の姿で現れた天津太玉の神は、弓矢で悪魔を祓い、弓弦を外して太平の御世を寿ぎます。箱庭のようなものです。

13:05

### 盆山

後見

宝生 和英  
辰巳大二郎

地謡

金井 賢郎  
今井 飛基  
内藤 龍二  
山内 崇生  
辰巳満次郎  
高橋 次郎  
小倉健太郎

**狂言「盆山」(ぼんざん)**  
盆山をたくさん持つ有徳人にいくら頼んでも一つもくれないので、物は垣根を破り、こつそり盗みに入りません。盆山の物色しているところを見つかり、慌てて盆山の陰に隠れます。盗人が顔見知りだと気が付いた有徳人は、なぶつてやろうとします。盆山とは、盆の上に石や砂などで風景を形づくつた置物で、箱庭のようなものです。

13:50

### 源氏供養

シテ柏山 聡子

ワキ福王 和幸

ワキ福王 和幸  
ワキツレ村瀬 提

大鼓 亀井 洋佑  
小鼓 大村 華由  
笛 小野寺竜一

〓 休憩十分 〓

**能「源氏供養」(げんじくよう)**  
安居院の法印は石山寺の観世音を深く信仰し、常に参詣していましたが、ある時若い女に呼び止められます。女は石山寺へ行くのなら源氏の供養をしなさいと頼み、自分も供養の場に立ち会いませうからと言つて姿が見えなくなり。法印は、女は源氏物語の作者、紫式部であろうと察し、石山寺にて供養を始めると、先程の女が紫の衣装をまとい現れます。式部は源氏物語の巻名を詠み込んだ文章に合わせて舞を舞い、供養に感謝して舞終わります。

14:50

### 富士太鼓

子方水上 嘉  
シテ後藤 裕子

ワキ安田 登

ワキ安田 登  
間 山本 則秀

大鼓 佃 良太郎  
小鼓 住駒 充彦  
笛 八反田智子

〓 休憩十分 〓

**能「富士太鼓」(ふじだいこ)**  
内裏での管弦の催しがあり、太鼓の役は浅間という楽人に決まっていたが、住吉から富士という楽人が同じ様に太鼓の役を望んで都に上つて来ました。帝は浅間に殺害してしまいましたが、不安になつた浅間は富士を殺害してしまいます。一方、都に上つた夫が戻らないので、妻は子を連れて都にやつて来ました。夫は、夫は殺された事を知らされず。悲しみに沈む妻は、夫の形見の衣装を身に着け、太鼓のせいであらうと、子とともに根みの太鼓を打ち、舞を舞い、衣装を脱ぎ捨てると住吉に帰つて行きます。

16:15

### 蟹山伏

後見

水上 優  
金森 隆晋

地謡

上野 能寛  
金野 泰大  
當山 淳司  
東川 尚史  
大友 孝史  
武田 俊樹  
朝倉 晋也

〓 休憩十分 〓

**能「蟹山伏」(しやうぎ)**  
唐の終南山の麓に住む男が、奏聞のことがあつて都に上る途中、異形の男に呼び止められます。何事かと尋ねると、異形の男は国土を守り、悪鬼を亡ぼす誓いを持ち、帝が政を全うするならば、宮中に現れ奇瑞を見せようと言ひ、その事を奏聞して欲しいと告げます。不思議に思つた男が名を尋ねると、進士の試験に及第する前に自殺した男が名を尋ねると、進士の試験を明かし、奏聞のあかつきには本体を現して、鬼を退治して御世を守ることと約束して消え失せませす。後半鍾馗は剣を持つて本体を現し、悪鬼を退治して王道を守護します。

16:30

### 鍾馗

シテ土屋 周子

ワキ森 常好

ワキ森 常好  
間 山本 則重

大鼓 亀井 広忠  
小鼓 岡本はる奈  
太鼓 澤田 晃良  
笛 栗林 祐輔

後見

内田 芳子  
葛野 りさ

地謡

奥家万理奈  
武田伊左  
関直美  
内田朝陽  
柏山 聡子  
久貫 弘能  
石黒 実都  
広島榮里子

終演予定 午後五時十五分頃

次回 文月能 ご案内	
2019年7月6日(土)	正午始
鶴 龜	影山 道子
生田敦盛	関 直美
籠太鼓	広島榮里子
熊 坂	内田 芳子
床几之形	

於・宝生能楽堂